織田武雄
末尾至行
応地利明 著

西南アジアの農業と農村

別技篤彦

アジアの地理学的構造において東南アジアの湿潤熱帯と西南アジアの乾燥熱帯とは著るしい対照を示し、それは当該地域の生産構造や生産様式のすべてにわたる対照ともなってあらわれる。東南アジアやインドにおける農村の地理学的な調査は日本を含む諸外国の人々によって一応着手され、その典型的なパターンもしだいに解明されているが、西南アジアのそれは地理的位置、自然条件の苛烈さないし言語的な障害などによってまだほとんど着手されていないといってよい。個々の村についての文化人類学的調査報告では S. M. Salim の „Marsh dwellers of the Euphrates delta" (1962) や Z. Eglar の „A Pajab Village in Pakistan" (1960) A. Huller „Buarij, a portrait of a Lebanese Muslim Village (1961) などが想起されるが西南アジア全体を通じての広範囲な地理学的調査はまだほとんど未開拓の分野であった。この時に当り織田教授をはじめ、末尾、応地三氏が一九五九—六四年にかけて三回にわたった京都大学イラン・アフガニスタン学術調査隊の地理学部門の報告書として表題の研究を刊行されたことは世界的にも大きな意義と価値をもつものというべく、これによって始めて広大なアジア大陸の東西に存在する湿潤と乾燥の二大地域の比較地理学的考察にも貴重なデータが与えられたことになる。

本書は西南アジア全体にわたる農業と農村のイクステンシヴな調査報告である総論と、その中でアフガニスタン、イラン、パキスタンの三国のそれぞれ一村をえらんでのインテンシヴな調査である特論との二部分から成っている。まず総論では第一章で西南アジアの農牧業につき自然環境との関連にもとづいてその種々な様式を概観する。すなわち農業については乾燥農業、灌漑農業、湿潤農業の三つに、また牧畜についても純粋遊牧、移牧、半遊牧の三つの類型を区分しそれぞれ地理的環境の差による分業の成立を明らかにする。またここでは同時に未耕地、耕作不能地などの割合の高い土地利用度や、普遍的な大土地所有についても概観をおこなっている。次に第三章では乾燥地域において農業を規制する最も重要な自然条件としての水をとりあげ、揚水、河川およびカナート（地下水）灌漑の三つの類型をわける。特に河川とカナート灌漑が詳しく、河川灌漑についてはインダス川を中心とする西パキスタンを例にとって灌漑発展の歴史、耕地分布と作物、それにもとづく主要農業地域の区分などを明らかにする。またカナート灌漑に関してはその技術的問題や分布、水利権、近代化の課題に及んでいる。

第三章以下はいわばこれらの序論的な部分の上に展開される本論的なものとみられるが第三章の「農業の諸タイプ」では農業における土地利用の全般的な状態を、農業の方式、作物の種類、輪作体系、農事暦、耕耘作業、収穫量、灌水の回数などにわけて調査する。これは調査地域に存在する二二一か村について得られた

データを、さきに述べた乾燥、灌漑、湿潤の三つの農業類型に還元して詳しい説明をおこなったものであり、これによって農業形式の地域的な分布を明らかにし、従って同時に各地域ごとの農業の特色を把握するのが目的である。ことに乾燥および灌漑の二つの類型については輪作体系とくみ合わせた詳しい分布図を作成しているが、イクステンシヴな調査の成果を示すみごとなものである。第四章は「農作業および器具」で主として農業の技術的な側面を扱っているが、特に全地域を通じての共通な作物である麦を中心として農作業のプロセスとその地域性を明らかにする。この場合、在来器具として特に犂と耙をとりあげたのは農業発展の歴史的な系統と、自然環境との関係をさぐるためである。二二一か村にわたって蒐集したこれら器具のこまかいスケッチや写真の助けによって著者たちの意図はかなり達成されたようである。なおこれら第三、四章の記述に当っては湿潤アジアないし、日本の農業との比較がつねに念頭におかれており、それを通して西南アジア農業の地域が明確に把握されよう。第五章はこの地方の農村でなお主要な役割を占めている家畜の飼養をとりあげ、その種類や飼養方式について述べ、さらに第六章では「水車経済」について論ずる。水車はここではストラボンの地理書にもみられるように古代から使用されており、それは後進的な社会構造や粉食の風習とも結びついて今日まで残存し、しかもこの地域での水車は単なる生産技術上の存在ではなく、地主制などとも関連する社会的存在として農村の理解には欠くことのできないものだからである。そして水車の分布、構造、その社会経済的意義を詳しく解明している。

第二部の特論では第一章としてアフガニスタン北部の村（アブドラハイ・コンバルナザール村）、第二章としてイラン北部の村（アミラバード村）、第三章としてパキスタン西部の村（カルワール村）をえらんで詳しい分析をおこなう。一般にインテンシヴな村落調査地の選定がまず重要な条件となるが、その事情の記述から始まってそれぞれの村について村の位置づけ、村の構成（形成過程、人口、家族形態、生活圏など）、土地制度や土地所有（地主や小作、耕地の集中や分散、相続制）、土地利用（水、作物、農具、作業など）、農業経営（その規模、収穫量や所得など）、家畜、家計から階層構造などの調査結果が記される。一般にこの地域の村はその規模が小さいので各世帯ごとのくわしい分析がなされているがこの努力は大へんなものであったと思われる。特に家族構成や土地所有関係、家計の収支分析などは貴重なデータであり、これらを通じて西南アジア農家の生活の実態が手にとるごとく理解される。アジア各地の農村の家計の実態についてのデータを集めている評者にとってはまことに有益な資料であった。一般にイスラム圏での村落のインテンシヴな調査は他地域に比べて容易なものではない。女性隔離の風習や村の内部へ外のものをいれない慣習があるからである。現に著者たちもアフガニスタンでは集落内部への立ち入りは許されなかったという。こうした阻害条件があったにもかかわらず一応この調査をやりとげた著者たちの努力には改めて敬意を表したい。またこの三つの村の調査報告を読んで感ずることの一つは同じ西南アジアの村落社会でも地域によっては著るしい共通性と相異性がみられることである。テヘランの遠郊的農村の性格をもつアミラバード村と、インドのカース

ト制の影響をうけているパキスタンのカルワール村と比べてもそれが明確に感ぜられるようであり、ここにも比較地理学的研究の面白さがみられる。

しかもこの特論における村落調査を読んで最も強い印象をうけるのはそれが何よりも地理学的な調査であることである。従来異質的な地域における村落調査はとかく社会人類学や文化人類学からの立場でなされることが多く、それはそれだけの意義と興味とを十分にもってはいるが、一般に環境、風土との関係は極めて簡略に扱かわれているにすぎず、また地図化という有力な武器を使っての表現もほとんどみられなかった。この点で地理学の側からみると何となく物足らなかったことは事実である。しかし本書における村落調査ではそれぞれの風土を生活の舞台とし、それに適応しつつ生きている人々の姿が地理学的方法によって浮きぼりにされ、かつ多数の地図を用いて現象を解明している。すなわちここでは地理学を主とし、文化人類学を従とした明快な調査が行なわれたのであり、この意味でも地理学的に貴重な文献たるを失なわない。

以上が本書の内容であるが、さらに西南アジアは歴史的にはいわゆる文明の十字路であり、民族移動の激しかった地域である。従ってこの歴史的な環境が農耕の形式その他の分布にいかなる影響を及ぼしたかのデータもいろいろ本書の中からくみとることができ、この点で歴史地理学的にも有益な資料にみちているといえよう。

要するに本書はその英訳の表題に〝Agriculture and rural economy in Southwest Asia〟とあるごとく、単なる農業条件の機械的分析の記録ではなく、ひろく農村経済の地理学的な分析であってイクステンシヴとインテンシヴの双方の調査を綜合して西南アジアの人間生活がヴィヴィッドに把握される点に何よりの特色がある。著者たちが限られた日数と費用とにかかわらずこの日本からみて僻遠の地域ととりくみ、そこの生活の実態を地理学的に解明しようとした成果はこうしてみごとな成果を結んだ。種々な条件さえ許せばみずからもこうした地域へ遠征して研究ととりくみたいという大きな刺戟をうけたものはけだし評者ばかりではないであろう。多数の図表やスケッチ、二百余におよぶ写真は一層本書の成果を高めている。本書は本年度における日本の地理学界最高の収穫の一つといっても過言でなく、同時に外国の地理学界に対しても誇るべき業績と思われるのである。

（B5判三六〇ページ、地図四一、表七八、写真二二五葉、一九六七年京都大学刊、価四、〇〇〇円）。

（立教大学教授）